論文

宇多朝における賀茂臨時祭成立の意義
－天皇の身体論的視点から清涼殿祭祀を読み解く－

田　中　陽　子

はじめに

農村を訪れると、地域の人々の手で大切に維持され、敬われてきた鎮守の森に美しい泉が湧き出で、水神が祭られている。水は生物にとって必要不可欠な物質であると同時に、水田稲作を行ってきた私たちの先祖の生活に無くてはならないものであった。しかし、陰陽道の影響を強く受けた平安時代以降の王権が関与した水に関する祭祀（雨乞祈願を除く）には、当時の人々を悩ませ苦しめてきた疫病、天災等の穢れを祓うマイナスのものを除去してゼロの状態にするという性質が思い浮かぶ。このような王権祭祀の引き算のイメージと鎮守の森に祭られた水神の密やかながらも生産性にあふれた豊かな印象との乖離に、私は常々違和感を覚えていた。

民俗学者の山上伊豆母氏は、『記紀』の中で黄泉の国から生還した伊弉諾尊が阿波岐原で禊を行った際に、天照大神をはじめ諸神が誕生したことを例に、水による「禊祓」は、穢れを洗い流すということに注視されがちであるが、古代的世界のなかで「禊祓」とは生産の儀式であったという考えを示している。(1)

この自然崇拝に基づく説は、前時代とは趣の異なる平安時代前期より始められた多くの王権祭祀の成立を紐解くうえで、大きな示唆を与えるものと考える。

さて、平安時代前期に始められた王権が関与した京都周辺部神社の祭礼で、淀川流域の上流部である鴨川沿岸に鎮座する上賀茂神社・下鴨神社の賀茂臨時祭と淀川中流域の山崎に鎮座する石清水八幡宮の石清水臨時祭は、それぞれ北祭と南祭という対の名前で呼ばれていた（以下、賀茂両社のことを指す場合は賀茂社と表記する。また、賀茂社の鎮座する鴨川は上流域を賀茂川と表記されるが、特に流域を特定する必要がない場合は鴨川と表記する。）。

今回とりあげる賀茂臨時祭は、宇多天皇の強い意志により寛平元年（889）に始められ、その後、臨時ではなく恒例の年中行事となった。宇多天皇は醍醐天皇の父帝であり、延喜・天暦の治として院政期以降の宮廷人から理想の時代としてみなされた一時期の礎を作った天皇である。しかし、その即位は度重なる天災と政治的な偶然が繋がって実現した脆弱なスタートであった。北祭である賀茂臨時祭は宇多天皇の即位当初から計画され、即位から2年後の寛平元年（889）に始められた。対して南祭といわれた石清水臨時祭は、承平・天慶の乱鎮圧後の天慶5年（942）に始められた報賽の祭祀である。

王権主体で行われた賀茂臨時祭と石清水臨時祭は、大きく次のような共通点があげられる。

① 賀茂社も石清水八幡宮も同じ淀川流域岸に社殿があること

② 儀式の前半部分が「清涼殿」という天皇のプライベート空間で行われること

③ 儀式の後半部分では、勅使・舞人がそれぞれの社殿に派遣され、天皇は社殿に行幸しないこと

④「東遊」という芸能と「御神楽」が奉納されること

⑤ 清涼殿孫廂にて天皇による御禊が行われること

②が示すように、賀茂臨時祭も石清水臨時祭も祭祀の重要な前半部分が、内裏清涼殿で行われた宮中の年中行事である。賀茂臨時祭成立以前は、王権が各社で行われる祭礼に関与する例はあっても、内裏の外にある神社の祭礼が、宮中の中で行われる例は確認できない。賀茂臨時祭と石清水臨時祭が極めて類似した内容で、対の祭礼であることは、何らかの理由があるはずであるので、石清水臨時祭の考察は別稿で行うものとする。

本稿では、山上氏が提唱した水に対する古代的な宗教感覚を念頭に置きながら、賀茂臨時祭の清涼殿で行われる儀式の内容のうち、天皇の「御禊」と、その後奏せられる「東遊」という芸能に注目し、宇多天皇の宗教的世界観を解明していくこととする。そして賀茂臨時祭が、その後の天皇と王城空間の関係にどのような変化をもたらしていったかについて迫っていきたい。

1. 賀茂臨時祭と「御禊」

（1）「御禊」の疑問点

賀茂臨時祭の清涼殿で行われる行程を『政事要略』からおおまかに復元すると次のようになる。

清涼殿での行程

祭 30 日前

使 1 名（四位）舞人 10 名（五位剣帯者）陪従 12 名を選出し、装束の手配を行う。

祭 4 日前

御馬御覧

祭 3 日前

試楽

祭早朝

装束下賜

①使は天皇より御衣を賜り、舞人・陪従も装束を賜る。（舞人には東遊の特有の衣装である髪にさす挿頭花を賜る。）

御禊

②天皇の御座、および使と宮主の座を設ける。

③内蔵寮の官人が御幣を捧げ持ち清涼殿へ入場。　④天皇御座へ着く。　⑤使と宮主（宮中の神事を司る神祇官）が参入する。　⑥舞人が御馬を率いて参入する。　⑦天皇による禊が行われる。（宮主の介錯で）この時清涼殿北廊では陪従による笛の演奏が行われている。　⑧宮主退出。　⑨御馬退出。　⑩使御幣を持って退出。　⑪諸所の撤収作業が行われる。

宣命

⑫上卿は清涼殿南の校書殿前の射場で天皇の宣命を承る。

酒座

⑬参列者に酒が振舞われる。

東遊の奉納

⑭再び天皇が出御される。　⑮使が舞人・陪従を率いて東庭に参入する。　⑯東庭で歌舞が披露される。

賀茂社へ出立

⑰使・舞人・陪従賀茂社へ出立（天皇は行幸せず）。

この後、上下賀茂社で東遊が奉納され、務めを終えた使・舞人を迎える還立の儀が行われる。

②～⑪までが御禊の内容を箇条書きしたものであるが、「御禊」を行う天皇以外に、天皇の名代である「使」「宮主」賀茂社に奉納する御馬を牽く「舞人」が登場する。

次の文が、天皇の出御から使が退出するまでの御禊に関する『政事要略』の記載である。

「時刻出御　同寮（内蔵寮）奉御贖物　蔵人自侍臣傳取供之　次使及宮主　自仙華門参入着座　次舞人牽御馬自北廊東戸参入　御禊畢　陪従於北廊外　發哥笛音　宮主退出　次御馬　次撤御贖物　次使起座就机邊　捧御幣而立　奉拝畢　使退出」

使と宮主は清涼殿の南側から清涼殿東庭に参入する。対して舞人に牽かれた御馬は北側から参入して天皇の御禊に立ち会っていることが分かる。宮主は宮中の祭祀を担う官であるため、天皇の御禊に関わっているということが推測されるが、使・宮主・御馬・舞人が具体的にどのような役割を果たしたか見えてこない。

平間充子氏によると、神へ奉納される芸能を担う舞人が、同じく神への奉納である御馬を牽いて参入することについて、願主である天皇の個人的な権威を高める役割があったとしている。(2)

賀茂臨時祭の開始が、宇多天皇個人と宇多天皇の政権を権威づけるために始められたことには同意である。しかし、賀茂臨時祭の４日前の「御馬御覧」の場で、奉納される御馬は参列者に披露されている。参列する公卿・上達部等の参加者の視線を意識した演出であるという平間氏の見解は、天皇の「御禊」の場における宗教的な視点が必要であるように思う。

御馬と舞人の「御禊」における役割については、舞人が奉

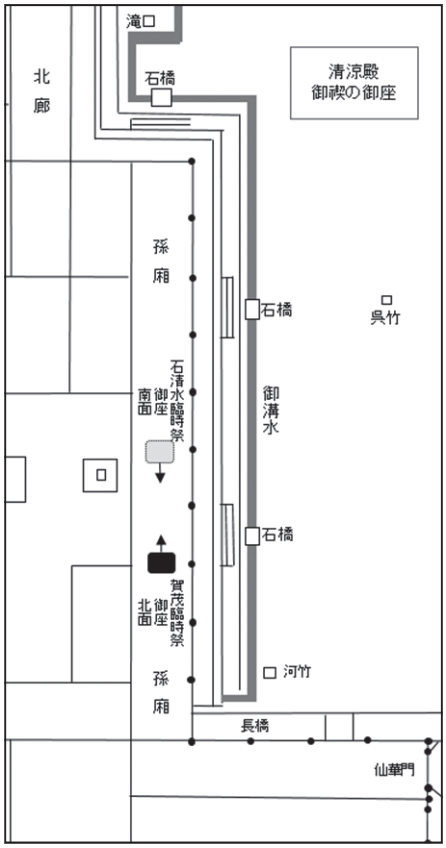

図１(3)

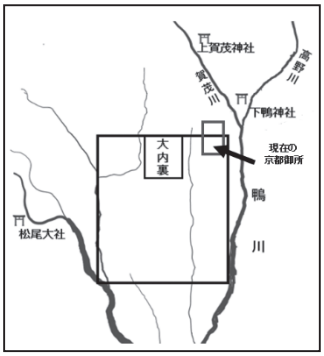

図２　著者作成

納する「東遊」を考察する際に併せて論述することする。ここでは天皇が「御禊」を行った「御座」と使と宮主の「座」の場所を『政事要略』と『江家次第』の記述をもとに復元し、御禊における天皇と宮主の役割について考察したい。

『政事要略』と『江家次第』を史料として用いる際に考慮すべきことは、『政事要略』は平安時代前期、『江家次第』は院政期の儀式について説明した書物であるということである。『江家次第』の記述はもちろん、『政事要略』についても、宇多天皇が寛平元年（889）に初めて行った賀茂臨時祭の内容を記述したものではない。年を経るごとに賀茂臨時祭で執り行われる儀式が追加もしくは廃止されて儀式内容が多少の変更があったとしても、祭祀のなかで行われていた儀式は、賀茂臨時祭を行う王権にとって、克服すべき課題の象徴であるという前提で考察していく。

天皇が御禊を行った場所は、『政事要略』では「掃部寮孫廂南三間鋪小莚二枚　其上供半畳　北面」とある。また『江家次第』においてこれに相当する記述では「南第三間敷少莚二枚・半畳爲御座　北面」とある。対して石清水臨時祭では、「石清水臨時祭南第五間南面供御座」とある。

当時の内裏は、現在の京都御所より西に位置し、上賀茂神社の位置は内裏の北北東に位置する。（図２参照）賀茂臨時祭の御禊では、孫廂の南から数えて三間目の場所で、天皇は賀茂社のある北側を向いて御禊を行ったことが分かる。さらに時代の下った朱雀朝に始まり、賀茂臨時祭の北祭に対し、南祭といわれた石清水臨時祭においては、南から数えて五間目の場所で南側にある石清水八幡宮の方角を向いて御禊を行うことが示されている。（図１参照）

現在の感覚では、儀式の前半で「御禊」があるとしたら、それはこれから行う神聖な儀式の前に、日頃の穢れを落とし、その身を潔斎してからその後の儀式に臨むという準備の工程のように考えてしまう。しかし、天皇は「御禊」の場で、賀茂社の社殿の方向を向き、神と対峙していたのである。

次は使と宮主の「御禊」での座であるが、『政事要略』では、「當南階北端庭中鋪葉薦。爲御幣机下敷　其南去一許丈　鋪菅圓座二枚　爲使・宮主座　相去六七許尺　宮主座西在　使座東差」とあり、『江家次第』でも「當御階北端庭中～中略～敷園座二枚　爲使・宮主座」とあることから、天皇の御座のある孫廂から階段を下って降りた庭中にあり、宮主の座は天皇に近い西側で、使の座は天皇からやや離れた場所に設定されていたことがわかる。

先に挙げた「御禊」の『政事要略』の該当箇所を『江家次第』で確認すると、以下のようになる。

「出御　位砲・束帯　蔵人頭献御笏　即先候御簾　次供御贖物　頭爲陪膳　五位蔵人爲盃供　高杯二本内蔵寮辨備安御膳棚　次宮主献大麻　入自仙華門　就長橋供之　陪膳傳供　即以返給　次宮主著座　次使着座　入自仙華門　巡方　魚袋　爲衛府之者　著闕腋　螺鈿劔　次舞人牽御馬　入自瀧口戸牽之　舞人不足時　歌人假牽之　御禊畢　宮主退出　歌人發物聲　於北廊戸外發之　拍子　笛　篳篥必可参會　次引出御馬　次撤御贖物　次使棒御幣立　先上社　次下社　松尾等取加之　次（御）拝　南段再拝　次使安幣退出　次入御」

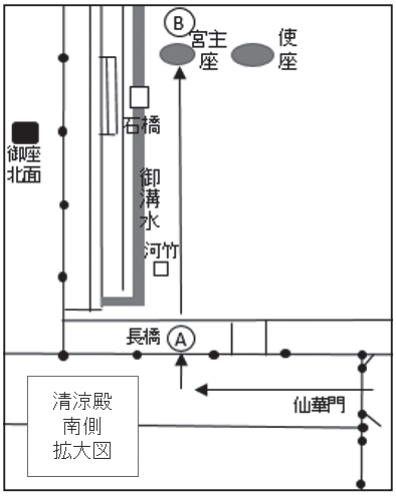

図 3

それでは、『江家次第』の情報から、天皇の「御禊」に奉仕したであろう、宮主の動きを確認することとする。（図 3 参照）

宮主が禊に使用される大麻を持って清涼殿南端にある長橋（Ⓐ地点）まで参入し、その大麻を陪膳を務める蔵人頭に渡し、禊によって穢の移された大麻を受け取った後、長橋から南階北端下の庭中にある座（Ⓑ地点）に移動し、着座したということが読み取れる。しかし、大麻の受け渡しを自分の座がある南階北端下で行わず、長橋で行ったのはなぜであろうか。

もし、宮主が御禊に使用する大麻を持って参入し、その大麻を陪膳を務める蔵人頭に渡し、蔵人頭より天皇に大麻が渡され、禊後は蔵人頭より穢れの移された大麻を持って退出するという役割だけであったのであれば、階段下で受け渡しが行われたであろう。またそもそも、大麻を運ぶ役割だけであれば、神職である宮主が必ずしも務めなくてもよいだろう。**宮主はⒶ地点の長橋でいったい何をしていたのであろうか。そして「御禊」の際に、天皇が賀茂神と対峙していたのには、どのような意味があるのであろうか。**

国文学者の西宮一民氏は、江戸時代の国学者賀茂真淵や本居宣長の見解をもとに「ミソキは、水によって身を洗ひ清めて罪や穢れを除去すること」「はらへは都度に応じて、科料を差出し、また祓つ物を投棄てて、罪や穢れを除去すること」としている。(4)

天皇は大嘗祭の際、鴨川へ行幸して「御禊」を行う。しかし、賀茂臨時祭での天皇は、清涼殿の孫廂から「御禊」の間、移動することはない。**そもそも、禊とは水を媒介とした祭祀であるはずなのに、なぜこの祭祀を「御禊」と呼ぶのであろうか。**

『政事要略』『江家次第』の記述では、御禊の際に「大麻」とは別に「御贖物（おんあがないもの）」が使用されていたことが分かる。これは「科料」または「祓つ物」に相当するであろう。現時点での情報では、「御禊」は「禊」というよりも、むしろ「祓」と考えたほうが自然である。

『江家次第』は宮中の殿上人が、儀式を滞りなく行うための指南書であるため、宮中の宗教的専門職である宮主がどのような行動をとっていたかについては記されていない。この謎を解くには、「禊」とは穢れを祓い、心身を清浄にするための行為であるという一般的な認識を白紙に戻して、水神を祭る賀茂社において、禊とは何かということを、改めて捉えなおすことが必要であると考える。そのために一旦賀茂臨時祭の場から離れて、「禊」という行為に注視しながら、賀茂社の祭神・祭礼の伝承と歴史を、王権との関りを交えて考察していきたい。

（2）賀茂氏の祭神と伝承

賀茂川岸に位置する上賀茂神社と、賀茂川と高野川の合流地点に位置する下鴨神社は、それぞれ平安京遷都以前からこの地を本拠地としてきた古代氏族賀茂氏の氏神である。上賀茂神社の主祭神には賀茂別雷命が祭られており、下鴨神社には賀茂別雷命の母神である賀茂玉依媛命と賀茂玉依媛命の父神で賀茂県主一族の祖である賀茂

建角身命が祭られている。賀茂建角身命は神武天皇が東遷する際に、八咫烏に変じて道案内をしたとされる神で、天孫系氏族といわれている。

『山城国風土記』によると、賀茂玉依媛が鴨川で水浴びをしていたところ、上流から流れてきた「丹塗矢」を拾った。その矢を館に持って帰り床に置いて眠ったところ、懐妊して生まれたのが賀茂別雷命だという。

山上伊豆母氏は女神の成立について次のように述べている。

「河辺の女性の伝承を持つことを第一の資格とし、第二には山岳的火雷や太陽の霊格をもつ神人とマグワイして神妻となり、第三に別離してみずから巫女王となるか女神のごとく祀祭されるという過程をたどる。」(5) とし、「火雷神の荒ぶる霊魂は水神によって鎮魂される」(6) としている。

『山城国風土記』では、「丹塗矢」の正体は、乙訓神社の火雷大神であったとしている。賀茂玉依媛命の伝承は、山上氏の唱える女神伝承の成立過程に一致する例である。

一方で賀茂氏は同じ山城国を本拠地としてきた渡来系の秦氏と関係が深い。鴨川が都の東端を流れることに対し、秦氏は５世紀より同じ淀川水系の桂川流域に入植しており、淀川水系の水運に大きな力を持っていた。秦氏側の記録である『秦氏本系帳』によると、賀茂川上流から流れてきて賀茂玉依媛が拾った「丹塗矢」の正体は、秦氏の氏神である松尾大社の祭神大山咋神であるとしている。(7)

松尾大社も賀茂社も共に双葉葵を神紋としており、ここにも深い結びつきが感じられる。さらには、松尾大社と同じ大山咋神を祭神とし、賀茂氏の同族である祝部氏が社家を務めてきた日吉神社の山王祭は、大山咋神と賀茂玉依媛の婚姻と、二人の間に生まれる御子神の誕生を再現した神事が始まりといわれている。(8) 大和岩雄氏によると、下社（以下は下鴨神社を下社、上賀茂神社を上社と表記する。）の鎮守の森である糺の森の由来は、松尾社と同じく秦氏の氏神である木島神社（氏寺である広隆寺に隣接）の元糺の森に由来するものであるとし、下社の成立には秦氏が強く関わったとしている。(9) まれびとである渡来系氏族と在地系氏族の婚姻という見方も考えられる。

賀茂社とならぶ天皇家の宗廟である宇佐八幡宮においても、創建当初から渡来系の辛島氏が主要な地位にあり(10)、共通点がみられる。

いずれにしても、賀茂玉依媛の伝承は、『古事記』『日本書紀』で表された倭迹迹日百襲姫命と大物主神のように、氏族の姫巫女と神との通婚の一例であるが、この伝承は、後述する賀茂祭における賀茂斎院の役割に大きく影響することとなる。

（３）王権と賀茂斎院

大同５年（810）の薬子の変平定後、嵯峨天皇は平安京の在地神を祭る賀茂社へ、わずか４歳の有智子内親王を賀茂斎院として派遣する。これ以降、天皇一代につき神に仕える一人の未婚の内親王（女王が卜選されることもある）が賀茂斎院として派遣されるようになる。祭主として内親王が派遣される例は、天皇家の祖神を祭る伊勢神宮の斎宮の他には、賀茂社のみである。

先述したように、賀茂社は松尾社との強い関係があった。保立道久氏は、嵯峨天皇の即位前の名である神野親王という名が、嵯峨天皇の乳母を務めた秦氏の氏神である松尾社北にある葛野郡上野に由来することから、嵯峨

天皇と秦氏との強い関係を指摘している。[11] このため、嵯峨天皇は松尾社と強い繋がりのある賀茂社にも親和性をもっていたと言えるだろう。

賀茂氏の女性が祭主を務めていた地位に、幼い有智子内親王を派遣するという嵯峨天皇の行為は、今後は平安京から遷都を行わないという強い在地神への決意表明だったと考えられる。そして嵯峨朝以降の賀茂の斎院は、天皇家の祖神を祭る地理的に遠い伊勢神宮の斎宮よりも重きを置かれる傾向となっていく。

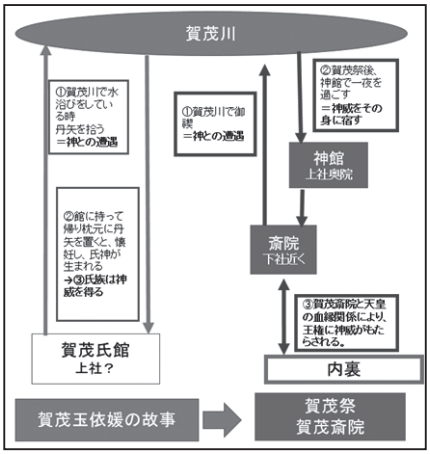

図４
（三宅氏の説をもとに、賀茂祭各儀式の再考察）

現代の葵祭は、平安時代の賀茂祭において賀茂斎院が禊を行うために鴨川へ行幸したことが原型となっている。

三宅和朗氏は、斎院が鴨川で御禊を行った賀茂祭の夜、通常の居所である紫野の斎院ではなく、上賀茂神社の神館で一夜を過ごしたことを明らかにしている。[12] 先述したように上賀茂神社は下鴨神社より歴史が古く、賀茂氏の根源的な聖地である。『山城国風土記』で記されている玉依媛が「丹塗矢」を拾うことで神迎えをし、神妻となって新たな神を宿すという故事を、賀茂斎院が再現していることになる。

三宅氏は言及していないが、賀茂斎院が神館で夜を過ごすことが賀茂玉依媛の故事を再現しているならば、同様に、神に仕える斎院が鴨川で「御禊」を行うことは、潔斎のために穢れを祓うだけではなく、賀茂玉依媛が水浴びをする際に神の化身である丹塗矢に出会ったように、斎院が鴨川まで出向き、王権に神迎えをするという意味があったといえる。天皇は自身の親族の女性を賀茂玉依媛の故事にならって賀茂神の神妻「賀茂斎院」として派遣することにより、「ヒコとヒメ」の関係から宗教的権威を得て、王権を維持してきたのである。（図４参照）

「わすれめや　あふいを草に　引き結び　仮寝の野辺の　露のあけぼの」（『新古今和歌集』）

この歌は院政期に賀茂斎院を務めた式子内親王が、上賀茂の神館で一夜を過ごした朝の情景を詠んだ歌だという。「わすれめや」生涯忘れることはないでしょうの意で始まるこの歌は、美しい曙を通して、神威をその身に感じた巫女としての斎院の感慨だとも読みとることができるだろう。

「禊」という穢れを祓うという行為が、賀茂社の祭礼の中では、神をその身に招くという二重の意味を持つのである。賀茂臨時祭のなかで天皇が「御禊」で北面していたのには、賀茂祭における賀茂斎院の御禊と同様に、祭礼の場である清涼殿に賀茂神を迎えるためであったのではないだろうか。これを裏付けるために、再び賀茂臨時祭の「御禊」に戻り、これに奉仕した宮主の動きに注目することとする。

（４）賀茂臨時祭「御禊」における宮主の役割

私は賀茂臨時祭の御禊で、宮主と蔵人頭が大麻の受け渡しを長橋（Ⓐ地点　図５参照）で行ったのは、「御溝水（みかわみず）」が関係していると考える。「御溝水」とは、鴨川の支流である大宮川から水を引き、清涼殿東庭を南北に流していた溝の水をいう。清涼殿で禊を行える流れる水があるのは、「御溝水」だけである。

『年中行事絵巻』に描かれた賀茂臨時祭の御禊の場面には、河竹付近に侍る人物が描かれている。（図６参照）宮主は穢れの移った大麻を長橋から（Ⓐ地点　図５参照）この御溝水に流すために、御禊に奉仕していた。なぜなら、南階段下の御溝水に穢れの移った大麻を流してしまうと、短い距離ながら、大麻が溝を流れる間に、天皇の居所である清涼殿に穢れを拡散してしまうと捉えられていたのではないだろうか。(13) 先に河川や海ではなく、天皇が清涼殿孫廂で行う祭祀をなぜ「御祓」ではなく「御禊」と呼んだかについて疑問を呈したが、**鴨川域の水である「御溝水」を利用した水の祭祀であるため、「御祓」ではなく「御禊」と呼ばれたのである。**

賀茂祭において、斎院は鴨川まで行幸して御禊を行った。そして斎院の「御禊」は、賀茂玉依媛の故事に基づき、穢れを祓うという意味だけではなく、神をその身体に招くという神招きの意味をもつ祭祀であった。先述したように、賀茂臨時祭の「御禊」における天皇の座は、賀茂社の方角である北側を向いて設定されている。天皇は賀茂社の方向を向きながら大麻に穢れを移し、穢れを鴨川の水に託した。単に儀式を前にして身を清めるという意味だけではないだろう。宮主の役割は、鴨川の水を通して天皇と賀茂社の神とを媒介する役割であった。

しかし、御禊に奉ぜられるものの中に、大麻とは別に「御贖物」の記述がある。大麻の記述は『政事要略』には記されていないが、先述したように「御贖物」の記述は、『政事要略』にも『江家次第』にも確認できる。宇多朝から大麻を使って御禊を行っていたかは確認できないが、「贖物」については、宮主ではなく蔵人頭によって奉幣の品々とともに、御禊の場に奉じられていたことがわかる。贖物について『日本国語大辞典（第２版）』（小学館）では、次のような説明がある。

1. 祓いの具。身のけがれや、身にふりかかる災難などを代わりに負わせて川などに流してやる装身具や調度。人形。形代。

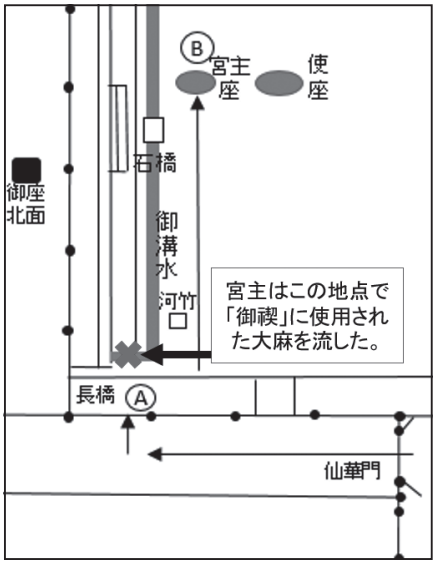

図５

御禊時の宮主の動き
①大麻を持って仙華門より参入
A地点
②大麻を蔵人頭に渡す

蔵人頭より天皇へ大麻が渡され、大麻による禊が行われる。

③蔵人頭より大麻を受け取る。
④御溝水に受け取った大麻を流す。（仮説）
⑤宮主座のあるB地点に進む
B 地点

御贖物による御禊

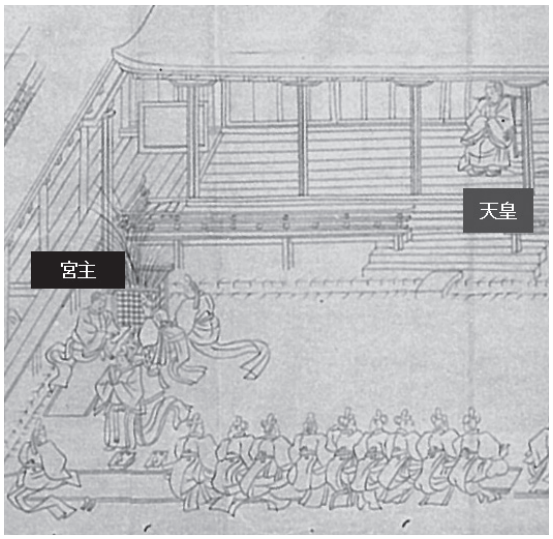

図６　賀茂臨時祭御禊場面『年中行事絵巻』

2. 祓いの道具をいう女房詞。

3. 罪過のつぐないとして出す物。特に律令時代、犯罪人に対して、銅銭、稲、布などの物件を納付させて罪をあがなわせたこと。また、その物件。

2は1の限定的な場合を表す同じ意味であるとして、1と3に共通する意味は、祓いを目的にするしないにかかわらず、使用する本人の代理・形代となるものというものである。

山上伊豆母氏は、禊に用いられる形代について次のように述べている。

「河海辺の儀礼に「人形」が必要なことは、ミソギの主人公の”身替り人形”を意味し、その人形を河海へ流離させることで、ミソギ者の鎮塊（まま）を行い霊魂の振起の効果をあらしめると解され、人形は主人公の依代つまりシャーマン人形である。」(14)

「御贖物」は奉幣の品々とともに撤収されていることから、使以下によって賀茂社へ運ばれることになると考えられる。さらに天皇の魂は御禊で使用されたもう一つの呪具である大麻に移され、天皇自身は清涼殿を離れることなく、御溝水を通じて二重に賀茂神と結ばれるのである。

以上の考察から、賀茂臨時祭における御禊とは、天皇の身体に水の神である賀茂神を招く儀式であったということが考えられる。

しかし、なぜこのような儀式を新たに設けなければならなかったのだろうか。さらに宇多天皇の宗教的世界観に迫るために、「御禊」の後に奉納される「東遊」という芸能に注目してみたい。

2. 賀茂臨時祭における「東遊」

（1）東遊の疑問点

東遊「求子」の疑問点　11世紀初頭には賀茂臨時祭のみならず賀茂祭においても東遊が奏せられるようになったが、荻美津夫氏によると、賀茂祭で舞人を務めたのが衛門府の官人のなかでも将監以下の下級官人であったのに対し、賀茂臨時祭において舞人を務めたのは近衛少将等の上級官人であったことを明らかにしている。(15)

残念ながら賀茂臨時祭が初めて行われた寛平元年（889）に、勅使に蔵人頭の藤原時平が選定されたという人事以外、記録には残されていない。しかし『寛平御記』に走馬のために賀茂社に献ぜられる馬十疋と舞人が賀茂社まで乗馬するために下賜する馬十疋を準備した記述があるので、寛平元年（889）の初回より「東遊」が奏せられていたということは明らかである。

賀茂臨時祭で奉納される「東遊」は「求子」と「駿河舞」という2つの演目で構成される。「求子」は、藤原敏行によって詠まれた「ちはやぶる　賀茂の社の姫小松　万世経とも色はかわらじ」（『古今和歌集』）という和歌をもとに歌詞がつけられた。藤原敏行は三十六歌仙の一人で歌人としても名高いが、宇多朝では蔵人頭を務めた宇多天皇の側近の一人でもあった。

しかし、藤原敏行の和歌が『古今和歌集』において、「東歌」の詞書に編纂されるところに疑問が残る。敏行の和歌以外の「東歌」にはいずれも陸奥・常陸・甲斐・伊勢の和歌が編纂されている。(16) **平安京周辺部にある賀茂社の神威を讃える歌が、なぜ「東歌」なのであろうか。そして賀茂臨時祭で奉納される芸能がどうして「東遊」といわれるのであろうか。**

東遊「駿河舞」の疑問点　「求子」と共に奉せられるのは「駿河舞」である。関東との境を接する東海地方の駿河の舞であるのであれば、その名の通り「東遊」と呼ばれる芸能であることに、違和感はない。

駿河舞は舞人が参入する前、歌曲である一歌、二歌が奏せられる。歌詞は以下のようなものである。(17)

一歌

をををを　はれな　手を調へろな　歌詞へむな　相模の嶺　をををを

二歌

え　我が夫子が　今朝の言出は　七絃の　八絃の琴を　調べたる如や　汝をかけ山の　かづの木や　をををを

荻美津夫氏によると冒頭の「をををを」という部分は、はやし詞であると同時に、神に降臨を促す言葉であるとしている。(18)

これを受けて、駿河舞が奏せられる。歌詞は以下のようなものものである。

や　有度濱に　駿河なる有度濱に　打ち寄する浪は　七草の妹

ことこそ良し　ことこそ良し　七草の妹は　ことこそ良し

逢へる時　いざさは寝なむ　や　七草の妹　ことこそ良し

あな安らけ　あな安ら　安ら　あな　あな安らけ　練の緒の

衣の袖を垂れてや　袖を垂れてや　あな安らけ

千鳥ゆゑに　濵に出て遊ぶ　千鳥ゆゑに　あやもなき　小松が梢に　網な張りそや　網な張りそ

いはたしたえ　笠忘れたり　や　いはたしたえ　殿ばらも　著くもがなや　笠まつりおかむ　笠まつりおかむ

や　知らざらむ　あぜかその殿ばら知らざらむ　いはたなるやたべの殿は　近き隣を　近き隣を

「駿河なる有度濱」とは現在の三保松原周辺の砂浜のことをいう。「逢へる時　いざさは寝なむ」という歌詞からは、万葉集の東歌で表されるような素朴な相聞歌の趣も感じられるが、それ以外はどのような場面を表しているのか想像し難い歌詞である。

野本寛一氏は「七草の妹」のことを「巫女、あるいは、古代生活においてそれに準ずる神聖な役割を果たす女性の禊の場面」であるとしている。(19)

また、荻美津夫氏は時代の下った11世紀に、能因法師が三島大社で奉納されていた東遊を見物し、次のような歌を詠んだことを例に挙げている。

「うど濵に　あまの羽衣　むかしきて　ふりけむ袖や　けふのはふりこ」『後拾遺和歌集』

荻氏はこの歌から東遊の「駿河舞」は天女が浜辺で袖を振る様子を表現した舞であるとしており、「（賀茂臨時祭をはじめとした臨時祭において）東遊はなぜ女性によって舞われずに、男性のしかも衛府官人という武人によって舞われたか疑問が残る。」と問題を提起している。(20)

伊藤喜良氏は、武官である平安時代の衛門府の官人が、宮中祭祀のなかで「蘭陵王」や「納蘇利」等、いかめしい形相の面をつけて舞うことについて、勇壮な舞で疫神や怨霊を祓い、呪術的な意味で宮中を守護する役割を指摘している。[21]

寛平元年（889）に初めて行われた賀茂臨時祭で舞人を務めた人物は記録に残っていないが、その後に行われた賀茂臨時祭で舞人を務めたのは、左右衛門府、近衛府の若い官人で、いずれも天皇の側近となりうる名家の子弟であった。しかし東遊は頭部に挿し花をして舞う女性的で優美な舞である。「蘭陵王」や「納蘇利」のように魔を祓う勇壮な舞ではない。

なぜ海辺で禊をする聖なる乙女の「駿河舞」は、女性ではなく、衛府官人の男性たちによって舞われなくてはならなかったのだろうか。また、宇多天皇は男性の側近による「駿河舞」を賀茂臨時祭で奏することにより、どのような問題を克服したかったのであろうか。

そこで賀茂臨時祭を始めた宇多天皇が、即位当初どのような問題を抱えていたかを紐解いていきたい。

（2）揺らぐ王権と天災

清和天皇の御代である貞観 9 年（867）定省王（後の宇多天皇）は、仁明天皇皇子時康親王（後の光孝天皇）と、嫡妻である班子女王との第三子として誕生する。9 世紀は地震の活動期であり、その人生は災害と切り離せないものであった。誕生の 2 年後、貞観 11 年（869）東北地方に壊滅的な被害をもたらした貞観大地震（陸奥海溝地震）が起こる。地震に際して発生した津波のことを『日本三代実録』では「海を去ること数十百里、浩々としてその涯を弁せず」と記している。事実、当時の海岸線より 4㎞以上離れ、小高い丘状地にある陸奥国府多賀城のふもと付近まで津波が達していたことが解明されており、地震の規模はマグニチュード 8.6 ～ 9.0 であったと推測されている。[22] 2011 年に起こった東日本大地震と同程度の地震が、防波堤や耐震構造のない建造物に住んでいた人々の生活空間を襲ったのであるから、その被害は想像を絶するものであっただろう。

地震に並行して 9 世紀は日本全国の火山活動も活発になった時期であった。特に貞観 6 年（864）の富士山の大噴火では、もともとあった湖を埋める大規模な火砕流が発生し、その後も富士山は活発な火山活動を続けた。

清和天皇は貞観 18 年(876)27 歳の若さで体調不良に陥り、わずか 9 歳の幼帝である陽成天皇に譲位する。しかし、譲位わずか 2 年後の元慶 2 年（878）に出羽蝦夷の大反乱が起こる。その後、清和の体調は回復することなく、元慶 4 年（881）の 1 月に 31 歳の若さで崩御した。[23] この時期、都でも度々の群発地震が起きていた。不安が充満する世相のなかで定省王は成長する。

『寛平御記』によると、幼少の頃から生臭いものを食さず、天台の山々で修行を行うという宗教的生活を送っていた。満 16 歳のころから、出家の意思を固め、その意思を母である班子女王に「出家するのなら妻子のいない今である」と伝えるも、その都度、思い留まるように言われていた。

そのような宗教的な生活をしているなかで、賀茂神より「ほかの神々は年に二度の祭礼があるのに、自分だけが一度（賀茂祭）だけとは寂しい。寂しさを感じる秋に祭礼を行ってもらうと嬉しい」との託宣が下りたという。それに対し宇多天皇は「自分はそのような祭祀を担うような身分の者ではない」と返したが、賀茂神は「祭祀を執り行える身分の者となる」と伝えたとされている。(『寛平御記』)

古藤真平氏は、この託宣が宇多天皇に降りたのは、陽成天皇の御代の定省王の頃であると推定しており、「信心深い平安時代の人々が「自分は神託を受けたのだ」と信じることは、今の我々が想像できない程、あり得べきことだったのであろう。」との見解を示している。[24]

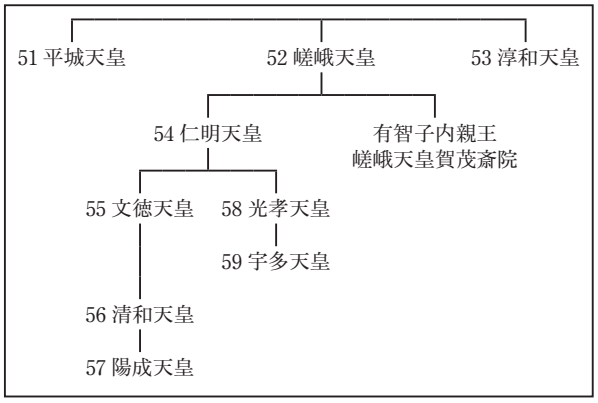

図 7

また、臨時祭の成立に先駆的な研究をした三橋正氏も「（幼少期から行ってきた）仏道修行も明神から神託を受けるという宗教体験に影響を与えたかもしれない。」としている。[25] 宇多天皇は少年期よりの山林での修行体験により、身体性を伴ったシャーマン的パーソナリティを育んでいったものと思われる。

『寛平御記』の記述から時系列で考えると、定省王は賀茂神から託宣を受けてからも出家の意思は持っていたようであるが、陽成天皇が清涼殿で乳母子を殺害するという事件を起こして廃位となり、摂政藤原基経に擁されて元慶 8 年（884）父帝光孝天皇が即位したことで、定省王は出家の機会を失ったと記している。（図 7 参照）

光孝天皇はあくまで中継ぎとしての天皇であった。即位に際し、伊勢斎宮・賀茂斎院二人の内親王を除く定省王を含むすべての子息が源氏姓へ臣籍降下することになり、皇太子空位のまま光孝天皇の御代が続いた。

ところが、即位からわずか 3 年後の仁和 3 年（887）7 月 30 日　南海トラフを震源とした大地震（仁和地震）が起こった。大阪湾沿岸に津波が発生し、多くの死傷者を出した。信濃国でも被害の記録があることから、地震域は関西・中部・東海地方の大規模災害であったとされている。[26] 災難は続くもので、地震後間もない 8 月 20 日には、台風とみられる洪水が都を襲い、鴨川が氾濫した。

その混乱のなかで、光孝天皇は崩御した。亡くなる前日の 8 月 25 日に、急遽源定省を皇太子にすることが決まり、皇籍に復帰した定省親王が立太子した直後に、光孝天皇は息を引き取った。同母兄が二人もいるなかで、定省親王が選ばれたのは、関白藤原基経の妹である藤原淑子に養育されたことが影響した。

川尻明夫氏は地震発生直前の 7 月 27 日に三日連続で光孝天皇が相撲の場に出御していたことから、大地震と水害の二つの災害を境に、天皇の体調が急激に悪化したとの見方を示した。さらに、「古代においては、天変地異は天皇の政治が悪いために起きると考えられてきた」ことが関係し、光孝天皇の心身に多大な影響を与えたとの可能性を示した。[27]

保立道久氏によると、当時の人々は地震と雷と火山は、三位一体のものと考えていたとしている。[28] 洪水の原因である大雨は雷を伴ってやってくる。このことから、大規模地震を起こした荒ぶる神と、台風を呼び鴨川に洪水を起こした荒ぶる神は同一視されていたといえるだろう。

台風により鴨川が大いに暴れ、父帝と多くの人々の犠牲が出るなかで、雷神である賀茂神からの「賀茂社を祭る新しい儀式を執行できる立場になる」という定省王に下された託宣は現実のものとなったのである。

（3）王統の正当性と「東遊」

父帝の崩御とともに即位した宇多天皇であったが、その即位の後ろ盾であった関白藤原基経が政務をボイコットするという阿衡事件が起こる。政務は大いに滞ることとなるが、宇多天皇はその間も賀茂臨時祭の計画を進めることとなる。

さて、東遊の「求子」の歌詞は、『古今和歌集』東歌「千早ふる　賀茂の社の　姫小松　万世経とも色はかわらじ」が元歌となっていることを紹介した。

三橋正氏によると、「姫小松」とは小松帝と称された光孝天皇のことを指し、この歌詞によって奏せられる「求子」は、光孝天皇を讃える芸能であるとしている。[29]「万世経るとも　色はかわらじ」という下句には、光孝―宇多という王統の系譜がこれからも続いていくということが示されている。これには、宇多天皇が自身の王権を確立するために、父帝の正統性をアピールしなければならない切実な理由があった。

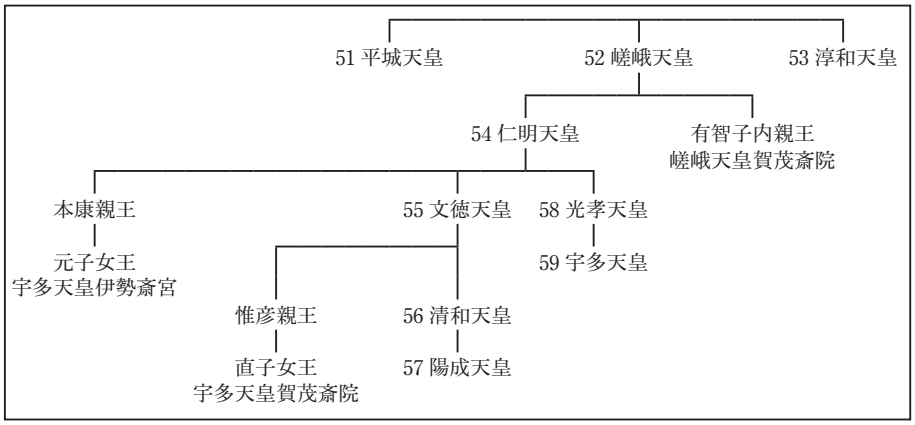

図 8

嵯峨天皇は自身の子女である有智子内親王を初代斎院とした。それ以降、歴代の天皇は幼帝でない限り、自身の内親王か姉妹を賀茂斎院にたてるのが常であった。しかし宇多天皇が即位した際に卜選されたのは、5 親等も離れた惟彦親王（文徳天皇皇子）の子女直子女王である。（図 8 参照）先述したように宇多天皇の姉妹は、光孝天皇の御代に賀茂斎院と伊勢斎宮を務めた 2 名の内親王を除き、全員臣籍降下していた。[30] 神妻である斎院が天皇の子女・姉妹である場合、王権は古代的なヒコとヒメの関係から、斎院の宗教的な権威によって高められるであろうが、本来主流とされた文徳－清和－陽成側の血筋から斎院が選定されたということは、宇多天皇が中継ぎの天皇として即位したことを宗教的側面からも示すものである。[31] このことは、賀茂神に選ばれ即位したと意識していた宇多天皇にとって、大変不本意なものであっただろう。また、これと同時に、自身は賀茂神に選ばれて即位した天皇であるので、賀茂斎院の仲立ちを得なくても、賀茂神と常にともにあるという強力な独自の意識を持ちえたようにも思うのだ。

東遊のもう一つの演目「駿河舞」が女舞ではなく、男性の武官によって奏せられたことは阿衡事件の際の宇多天皇の状況と深く関係していると考える。結論に入る前に、今一度賀茂臨時祭の朝に行われる「御禊」の場に登場した東遊の「舞人」のことを考察したい。

神の依代としての東遊舞人　賀茂臨時祭試楽の後、舞人は蔵人頭を通して清涼殿南東の長橋で挿頭花を賜る。院政期に記された『富家語』によると、天皇に背を向けることとなるにも関らず、「丑寅の方に向きて」受け取るようにと示してある。天皇より賜る挿頭花であるが、内裏から北東にある下社の方角を向いて受け取るように示されているのは、賀茂臨時祭で奉納される東遊が天皇に奉じられるものではなく、天皇が主催となり神に奉ぜられる神事であったことを示すものであろう。

さて、賀茂祭・賀茂臨時祭が王権のための祭祀であるが、加茂祭よりも古く本来の祭祀氏族である賀茂氏によって行われてきたのが御阿礼祭である。6世紀、欽明天皇の御代の始まったとされており、現在も非公開で行われている。(32) 御阿礼祭では榊の木が神の降り立つ依代とされるが、山上伊豆母氏は、雷神の依代となるものについて、矢等の細長い形態や金属性のものを挙げている。これらは落雷される対象物を想起させる。他に遮るものがない場所に生えている樹木は、他の場所よりも落雷が起きる確率が高い。樹木に落雷が起きた様を神が降りたつ様だと古来の人々が捉えてきたため、上賀茂の森に生える代表的な樹木である榊の木が依代とされたのではないかと考えられる。舞人に下賜された頭花挿は、烏帽子の上から前頭部に挿す突起状の装飾であるが、これは榊の木と同様に雷神が降りたつ依代を象徴しているように思われる。

御禊の後奉納される「東遊」では、宇多天皇の王統の正当性を表現した「求子」と神妻となった玉依媛の故事を模した「駿河舞」が奉せられた。

先にも述べたように、賀茂臨時祭を始めた宇多天皇は、賀茂神の神意によって即位できたという自負を持ちながらも、賀茂神と仲立ちをするはずの賀茂斎院とは血縁関係の薄い天皇であった。そのため**自身が賀茂斎院を介することなく、常に賀茂神とともにある聖王であることを示すべく、賀茂臨時祭では賀茂社へ行幸することなく、**

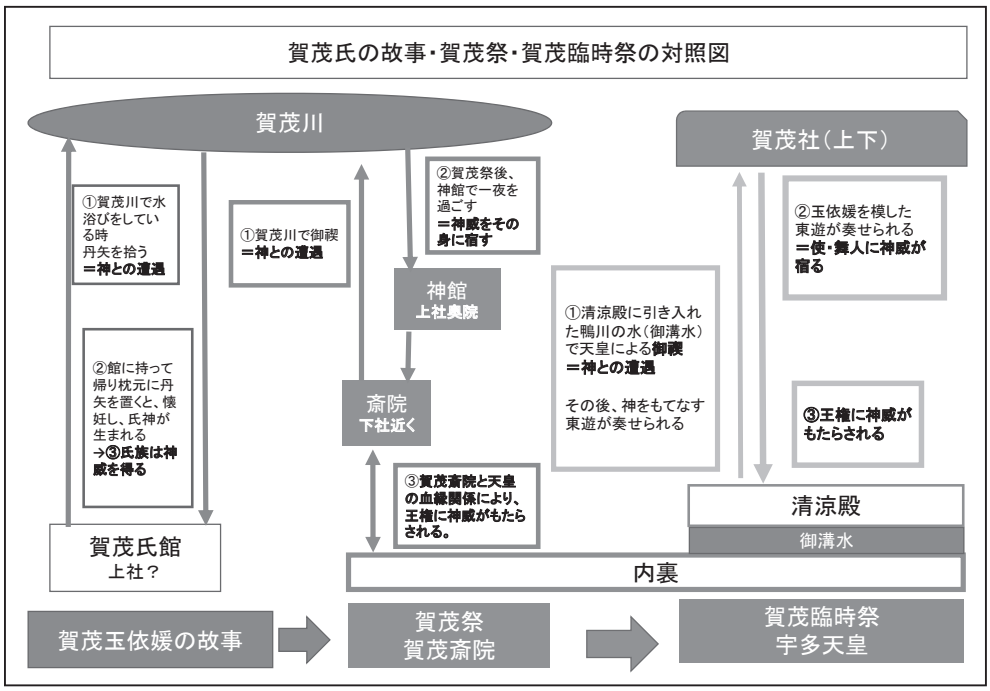

図9

自身の居所である清涼殿で御禊を行った。さらに自身と同年代の側近であり身体を警護する衛府官人に、神に仕え、神と一体となる水辺の乙女の舞を舞わせた。[33] **神と一体となる者は、巫女王である賀茂斎院ではなく、宇多天皇であり自身の王権である必要がある。だからこそ「駿河舞」は天女の舞でありながら女舞ではなく、男性であり自身の側近である武官によって奏せられたと考えられる。**（図 9 参照）

「御禊」の場には、神の依代たる舞人が御馬を牽いて参入するが、賀茂社と馬との関りは古い。『山城国風土記』によると、御阿礼祭の始まりは飢饉が起きた際に、馬を走らせて神を喜ばせたことが始まりとされている。御禊においては、「次舞人牽御馬　入自瀧口戸牽之」（『江家次第』）とあるように、賀茂神の眷属である御馬が神に仕える聖なる乙女を演じる舞人によって賀茂社の方角にある「滝口」[34] から連れて来られる。（図 10 参照）これは賀茂神の眷属である御馬が賀茂社から天皇の禊に立ち会いにやってくるということを表しているだろう。

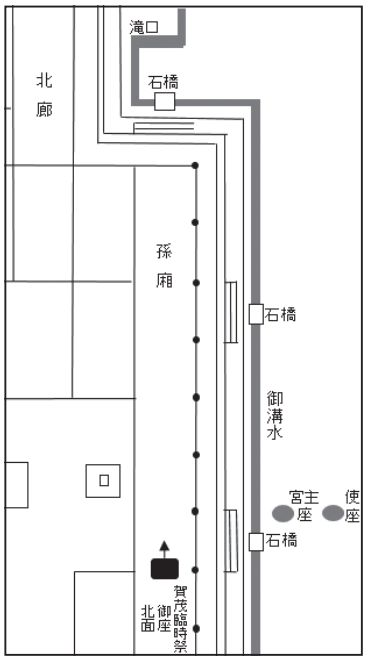

図 10

天皇による御禊が完了した際、「歌人發物聲　於北廊戸外發之　拍子・笛・篳篥必可参會」（『江家次第』）とあるように、同じく賀茂社の方角である北廊では、楽器による音楽が奏せられている。これは天皇が御禊による神との交感が成り、神からのポジティブな反応を表現した演出と思われる。

御禊に立ち会った御馬は、勅使・舞人とともに御禊で生成された天皇自身の形代である「御贖物」を賀茂社へ運ぶ神の眷属である。同じく御禊に使用されるにも拘わらず、宮主によって御溝水に流され、穢れを移された大麻には「御」の字が記されておらず、「御贖物」に「御」が付けれているのは、「御贖物」が天皇の玉体を模したものであったからであろう。

また、信州や東北地方は古くから馬の産地であった。[35] 東国や東北地方からもたらされた馬が聖王のもとへ引き出され、賀茂神を祭る祭祀が行われるということは、纏ろわぬ神々や人々が聖王のもとへ降り、その支配下の元、賀茂神の神威にひれ伏すということを同時に象徴しているだろう。

（4）アヅマと「東遊」

それでは、賀茂臨時祭で奏せられる芸能がなぜ「東遊」とよばれるようになったか、当時の東国と王権との関係から考察していきたい。

阿衡事件が表面的に解決をみせた寛平元年（889）十月、宇多天皇が賀茂臨時祭開始に向けて動いていた矢先、同母妹の死により、祭祀の実施を一時中止している。そして十月二十四日、宮中内の祭祀を行う神職である宮主と左近衛将監藤原滋実を鴨川へ派遣して禊を行わせている。

『日本三代実録』によると、藤原滋実は元慶 2 年（878）の出羽蝦夷の大反乱の際に、出羽国守だった父藤原興世の元で、反乱民に懐柔策をとることによって、反乱平定に大きく貢献した武官である。天皇の名代として賀茂

神の祭祀に携わる身としては、いささか官位が低いように思われるが、『寛平御記』にその名が記されていることをみると、天皇の側近くに侍る武官のなかで、滋実が特に選ばれて派遣されていたと考えられる。

保立道久氏は承和４年（837）の鳴子火山と同時期に起こっていた蝦夷の反乱について、「朝廷にとっては、噴火・地震と蝦夷の抵抗は一体となっており、あたかも火山神が蝦夷の人々の味方をしているかのようにみえたのであろう。」(36) としている。

災害を引き起こす神々が東北地方の反乱を引き起こしているという考えのもとで、東北地方の反乱鎮圧に貢献した武官がこの禊に派遣されたとすると、鴨川で行われた禊の儀式は、天皇の身内の死の穢れを祓うというものだけではない。宇多天皇は、度重なる災害と東北の反乱の同一線上の脅威として、同母妹の死を捉えられていただろう。

桓武朝で武功を挙げた坂上田村麻呂が、死して東北を望む清水の地に立ったまま埋葬されたのと同様に、東北の反乱鎮圧に功のあった藤原滋実がこの禊に派遣されたのには、呪術的な意味で東からやってくる荒ぶる神々に対応する人選であったのではないだろうか。

伊豆卜部氏と東国境界祭祀　宇多朝で宮主を務めたのは卜部豊宗であると推定されている。『日本三代実録』によると、豊宗の父卜部平麻呂は、亀卜の技術をかわれて大使付きの遣唐使として入唐しており、帰国後神祇官となり宮主を兼務した。後に吉田神道を打ち立てた吉田家の祖となった人物である。当時神祇官は壱岐・対馬・伊豆の卜部氏から選出されており、亀卜・解除（祓・御贖）や鎮火祭・道饗祭などを担うとされている。(37) 卜部平麻呂 (38) は伊豆卜部氏の出身で、三島大社に関係したという説もある。(39)

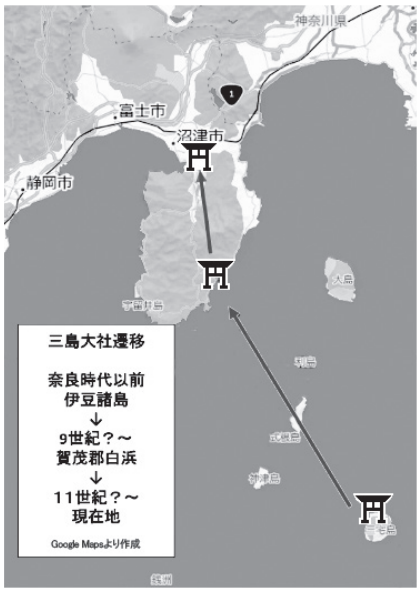

図 11

元来、三島大社は、伊豆諸島の神々を祭った社とされており、壱岐・対馬と同様、水特に海洋の祭祀に従事した一族が特に選ばれて宮中祭祀に奉仕したといえる。(40)

原秀三郎氏は次のような重要な指摘をしている。(41)

① 天平 18 年（746）の調に三島大社は伊豆諸島各島々のことを指す「伊豆国賀茂郡三島郷」とあることから、奈良時代の時点では、壱岐・対馬と同様に離島にあった。（図 11 参照）

② 伊豆諸島のうち三島大社の根源地は、「三宅（屯倉）」という王権の直轄地を表す地名のある、今なお活発な火山活動を続けている三宅島を推定する。（図 11 参照）

③『古事談』によると堀川天皇の時代に、伊豆大島の住民は下人に至るまで皆亀甲占に長けていて、召して占わせたという記述があることから、院政期に至るまで伊豆諸島で厳しい自然を相手に生活をする人々の技能が、王権に必要とされていた。

④ 醍醐朝に記された『和名類聚抄』では三島大社は伊豆国賀茂郡大社郷にあったことが記されており、9 世紀の所在地は現在の下田市白浜の伊古那比咩神社周辺が推定されている。現在の三島市に移ったのは、11 世紀ごろと推測する。（図 11 参照）

⑤ 三島大社の祭神について、賀茂社の祭神と同神である雷神であるという記録がある。

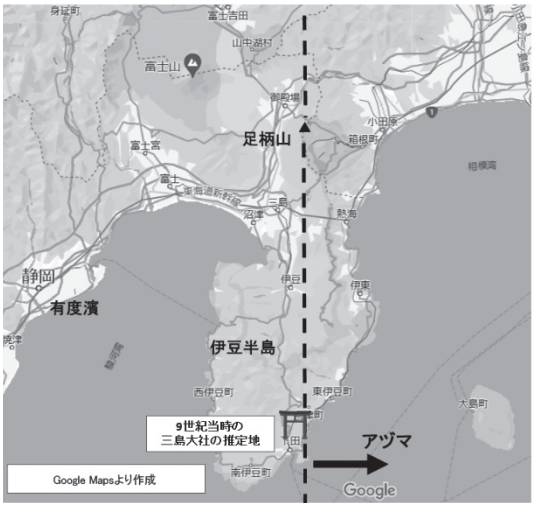

図 12

国文学者の西郷信綱氏は、神祇官が壱岐・対馬・伊豆の卜部氏から選出されていたことに対し、壱岐[42]・対馬[43]から選出された理由は、朝鮮半島との国の境界を守る海人の呪術が中央王権に必要であったからとしている。また、古代において「アヅマ」「サツマ」は、国の端を表す対の言葉として存在しており、足柄山から東がアヅマであると考えられていた。伊豆の卜部氏が選出された理由は、足柄山から南下して伊豆半島及び伊豆諸島で海洋の祭祀を行っていた卜部氏が、国の境界を守る祭祀を行う人材として中央政権の祭祀に必要とされていたためとしている。[44] 足柄山からちょうど伊豆半島を真南に南下した地点に、三島大社の 9 世紀時点の推定地があることは大変興味深い。（図 12 参照）

先述したように父帝光孝天皇を死に追いやった仁和の大地震は、関西地方から東海地方までの広範囲に及ぶ南海トラフ域で起こった大地震である。『日本三大実録』には記述がないが、駿河湾の被害は甚大であったと想像される。[45] 駿河湾の内陸にそびえるのは、火砕流をまき散らす富士山である。そしてこの大地震は、鴨川の反乱という荒ぶる雷神を伴ってやってきた。先述したように保立道久氏は地震・火山・雷を三位一体のものとしている。更には東北地方で起こる反乱も、天災を引き起こす荒ぶる神々が纏ろわぬ人々に味方するとも考えられてきた。これらの荒ぶる火性を持った神を鎮めるには、山上伊豆母氏のいう水性の聖なる巫女の慰撫が必要である。

先述したように西郷信綱氏は古代においては足柄山より東がアヅマであるとしている。[46]

前川明久氏によると、光孝天皇を讃える歌詞がつけられている「求子」は、5 世紀から 6 世紀に東国諸国造が子弟を朝廷に差し出す際の従属儀礼としての芸能が始まりであるとしている。[47]

これに対し、荻美津夫氏は「求子」の元曲は、三島大社で奉納されていた神楽「八乙女」ではないかとの見解を示している。[48]

荻氏の三島大社の「八乙女」が原曲であるとの説を取るならば、9 世紀当時「求子」はアヅマとのちょうど境界に位置する社の芸能であることになる。そして東遊びのもう一つの演目である「駿河舞」は足柄山のすぐ南西にある三保の松原（有度濱）の天女の舞である。東遊はいずれも 9 世紀活発な火山活動を続けていた荒ぶる富士を鎮めるための芸能であり、**同時に国の端で奏せられる境界祭祀であったのだ。**

そのため、東北地方・関東地方からやってくる火性の災難（地震・雷・火山）を慰める祭礼である賀茂臨時祭で奏せられる芸能を「求子」も「駿河舞」も含めて「東遊」と呼んだのであろう。

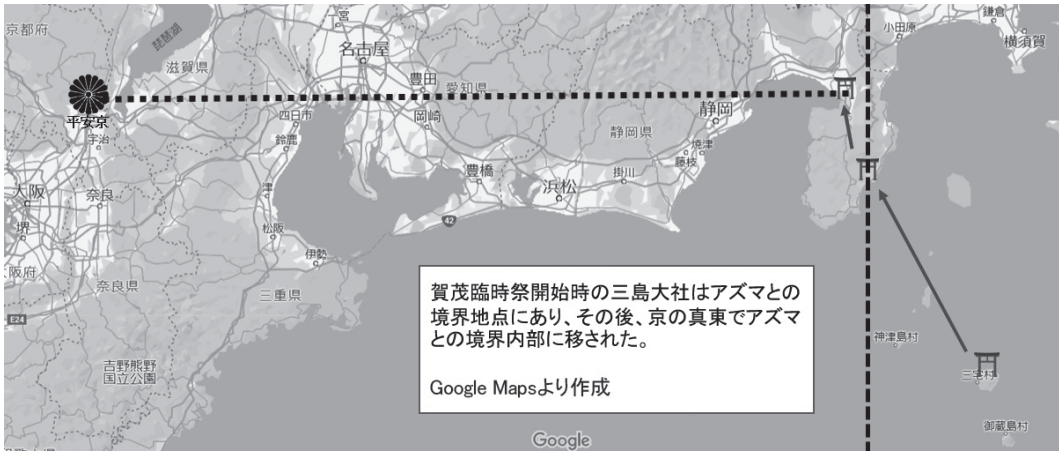

図 13

11 世紀頃、なぜ三島大社が現在の地点に移設されたかについて更に考察すると、三島大社の現在の場所が、京都から真東の地点であることが分かる。（図 13 参照）9 世紀時点の下田市白浜地点であれば、奈良時代以前の所在地である伊豆諸島を臨む海岸地点にあり、本来の海洋信仰の名残を残す場所にあった。しかしながら、11 世紀より現在の地点に移された三島大社の所在地は、本来の海洋信仰から完全に離れてしまっている。これは、三島大社が東国からの脅威から京を守る、王城鎮護の機関として王権に取り込まれていることを示しているだろう。

（5）天皇の身体と国家観―清涼殿と平安京

古瀬奈津子氏によると、九世紀においては天皇が日常的に政務の場として紫宸殿が用いられていたのに対し、十世紀に入ると紫宸殿は節会や新嘗祭などの儀式の場所として用いられるようになり、代わって清涼殿が天皇の日常政務兼プライベート空間として用いられるようになったという。[49]（図 14 参照）

古来より中国では「天子は南面す」といわれ、皇帝は南向きに政務を行うとされてきた。紫宸殿もこれに倣い、南

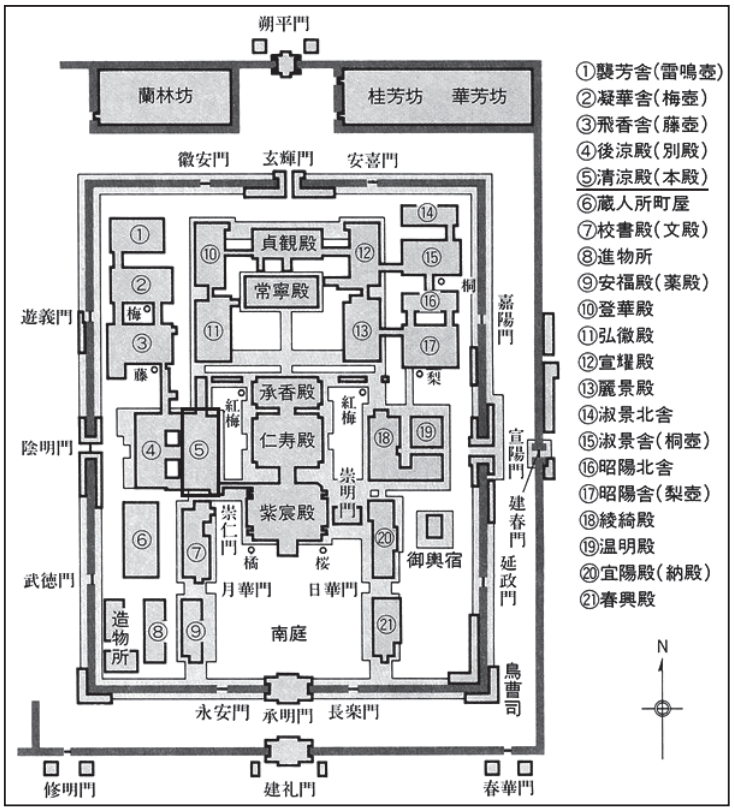

図 14 『日本大百科全集』 小学館　1984 ～ 1994 より

向きの建造物である。（図 14 参照）

賀茂臨時祭は、9 世紀末に開始され、東向きの建物である清涼殿で行われた。天皇の「御禊」は賀茂社の方向である北に向きながらも、東側の孫廂で行われる。このことは、中国に倣った律令国家体制の宮城の在り方から大きく変容していることが分かる。

天皇による大嘗祭の「御禊」や賀茂斎院の「御禊」は鴨川で行われたが、賀茂臨時祭の天皇による「御禊」は「御溝水」によって行われた。先述したように、鴨川は川神である賀茂神そのものであり、「御禊」は賀茂神を王権に迎え入れるための儀式である。それと同時に、鴨川は東国諸国と平安京を区切る最後の境界であり、平安京内部の穢れを海へと流す浄化システムでもあった。東向きに建てられた清涼殿で行われる祭祀は、関東・東北地方を意識したものであるといえる。

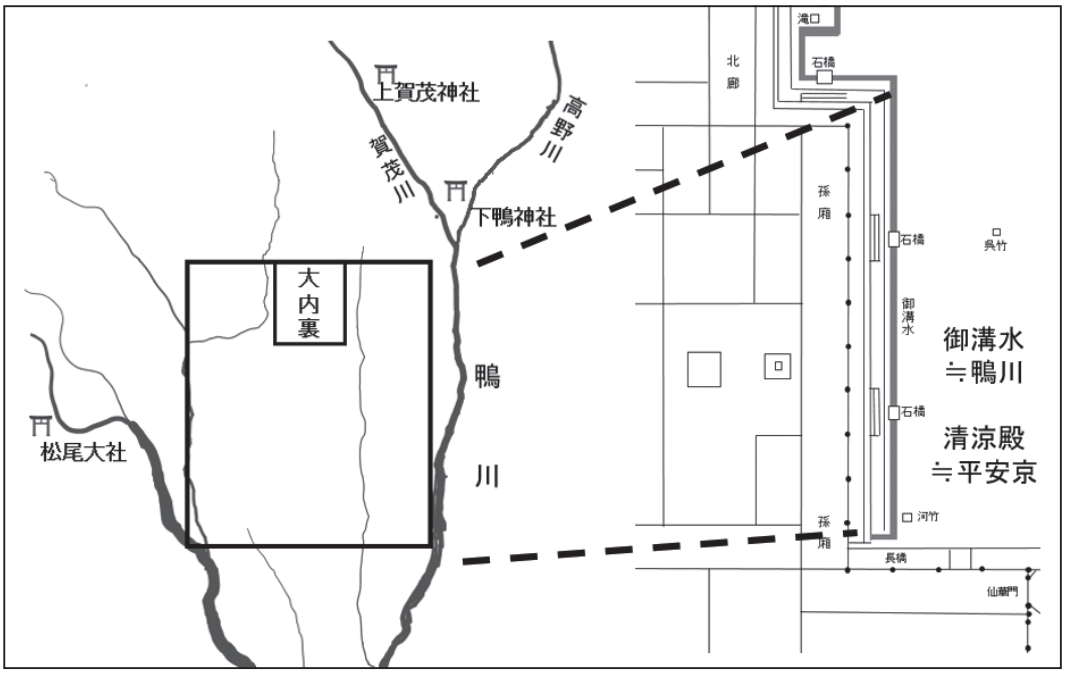

図 15　＊平安京周辺図は著者作成

図 15 で示すように、「御溝水（みかわみず）」を「鴨川」に見立てた時、**清涼殿ひいては天皇の身体は、平安京の王城そのものといえるだろう。**

そして清涼殿の東庭で奏せられるのは、アズマとの境界である三島大社に由来する芸能の「東遊」である。平安時代前期においては、足柄山より東の東国は辺境地帯で、東北は異界も同等に捉えられてきた。賀茂臨時祭は、平安京が箱庭のように再現された清涼殿で行われた、東国からの脅威に対する国家的境界祭祀であったのである。

宇多天皇によって始められた賀茂臨時祭において、「御禊」は天皇が賀茂神と一体の存在であることを象徴し、自らの正統性を高める機能をもっていた。さらに「東遊」は、賀茂神に祝福された正統な聖王のもと、東国からの脅威を慰撫する境界祭祀であった。

（6）賀茂臨時祭成立と宇多天皇

先述したように、寛平元年（889）初めて行われた賀茂臨時祭で勅使となったのは、基経の長男で満19歳の蔵人頭である藤原時平である。宇多天皇は同世代で3歳年長の22歳であった。『寛平御記』によると、基経に賀茂社への奉幣に対し何度も相談の手紙を書いたことが記されているが、勅使に時平をたてて賀茂臨時祭に臨んだ時のことを次のように記している。

「而して時平朝臣をして幣を捧げしめ、念願して曰く、朕微下の時、（鴨明神）託宣して曰く、他の神明は皆一年に二度の祭を得るも、我只一度のみ、汝（定省王）秋時まさに幣帛を奉るべしと。（定省王）答えて曰く、身を賤してこの時に仁へずと。又（鴨明神）答へ宣べて曰く、必ずまさにこの事に任ふべきの由有るべしと。然れば（鴨）明神の神託、徽験かくの如し。」

改めて自身が賀茂神に選ばれて皇位に就いたことを示すとともに、自身を帝位に就けた時の権力者の基経へ配慮を示しつつ、自身の権威を高める祭礼に基経の子息を勅使としている。このことから、阿衡事件後の難しい状況下においても、巧みに自身の権威下に時平を取り込もうという意思が読み取れる。(50)

宇多天皇は強力な自意識を心の内に持ちながらも、生まれながらに天皇になることが定められた天皇には持ちえない、優れた権力へのバランス感覚を持った人物であったこともうかがい知ることができるだろう。

阿衡の紛議により、宇多天皇の政務を妨害した関白基経の子息は、まんまと宇多天皇を神に選ばれた聖王とする祭祀を執行する長に立たされてしまったのである。この出来事は、後に宇多天皇の側近である菅原道真の大宰府左遷という排斥事件の火種を生む出来事の一つであったかもしれない。

『寛平御記』に記されている父帝光孝天皇から送られた愛猫の記述を読むと、宇多天皇は非常に映像的にイメージする力の強い、感性豊かな青年期を送ったことが想像できる。また、菅原道真や橘広相等、優秀な学者を、身分に関りなく重用している。『大鏡』では、王侍従であったことが記されているが、即位前に宮中行事を執行する実務官として、実際に奉仕していたのであれば、さらに身分の低い神祇官との交流もあったかもしれない。聡明で宗教的関心の強い青年王は、強力な自意識を持ちながらも、様々な人々の見解を柔軟に吸収し、その後の王権の在り方を変える独自の世界観を形成していったのではないだろうか。

終章　賀茂臨時祭の成立と中世的王権の成立

先行研究では用いられなかった宗教的視点から、賀茂臨時祭が行われた天皇の日常の居所である清涼殿を天皇の身体と見立てて、清涼殿平安京、当時の国土全土という3つの空間を対照して考察した。これにより本稿では成立期の賀茂臨時祭について、新たに以下の6点を明らかにしてきた。

① 臨時祭における清涼殿での天皇の御禊は、鴨川の流れを模した「御溝水（みかわみず）」を用いて行われたこと

② 賀茂臨時祭の御禊は、賀茂神を天皇の身体に招くものであること

③ 賀茂臨時祭で奏された東遊は、水辺の乙女である賀茂氏の祖神賀茂玉依媛を模した芸能であること

④ ③の水辺の乙女の力により、東遊は東国（東北地方含む）の脅威（天災や反乱）を慰撫し、鎮める芸能でもあること

⑤ 賀茂臨時祭が行われた清涼殿は、天皇の身体を象徴しており、同時に「御溝水」を鴨川にみたてた平安京を象徴していること

⑥ ①～⑤のことから、賀茂臨時祭は清涼殿で行われた宇多天皇の正統性を示す祭祀であると同時に、国家的な境界祭祀であること

これまでの先行研究では、三橋正氏の賀茂臨時祭を始めとした臨時祭は、天皇の私人としての祭祀であるという位置付を基に展開されてきた。[51] 今回新たに①～⑥のことが明らかになったところで、賀茂臨時祭の成立の歴史的位置づけと、その後の王権に与えた影響を再構築してみた。

岡田荘司氏は、平安時代以前、賀茂社、松尾社、春日社等、各氏族が祖神や在地神を祭ってきた祭祀を、平安時代に入ると王権が王権主導の「公祭化」することによって、宗教的な意味での中央集権化していった過程を明らかにしている。[52] この宗教的意味での中央集権化は、氏族ごとに独自の宗教文化と共同体を有していた古代世界を、緩やかに解体していく大きな流れの原動力となった。

この流れは、薬子の変後、嵯峨天皇が在地神にすぎなかった賀茂社へ賀茂斎院を派遣し、賀茂氏の斎女が行っていた祭祀を賀茂斎院に移行させてことに始まると考える。そして独自の宗教的世界観、権力への意志を持った宇多天皇が賀茂臨時祭を開始したことにより、女性の身体に神を降ろすという呪術的な祭祀から、王権が王権そのものの儀式の中に祭祀を取り込むようになることを加速させる契機となったと考える。

伊藤喜良氏は、七瀬祓の研究によって鴨川が王権を呪術的な意味合いにおいて清浄に保つため、極めて重要な役割を果たしたことを明らかにされている。[53] 七瀬祓は洛中の東岸を流れる鴨川岸の七か所から、天皇が息を吹きかけた形代を流し、天皇ひいては王権の穢れを鴨川へ流し清める。

七瀬祓いは村上朝の応和 3 年（963）に開始されたが、承平・天慶の乱の報幣として石清水臨時祭が初めて行われたのが朱雀朝の天慶 5 年（942）で、毎年の恒祭となるのが円融朝の天禄 2 年（971）であることから、石清水臨時祭の成立期と同時期であり、賀茂臨時祭は寛平元年（889）に始まり、昌泰 2 年（899）に恒祭化することから 60 年ほど先行する。賀茂臨時祭を境に、河川に関連する祭祀が増加しているのがわかる。

七瀬祓には、天皇自身は賀茂社へも鴨川へも行幸することはなく、形代を鴨川へ運び禊を行うという独自のスタイルが踏襲されている。天皇自身の穢れを祓うだけの祭祀であれば、鴨川岸七か所から形代を流す必要がない。本稿では賀茂臨時祭の御禊で天皇は賀茂神と一体になる行為であるということを論述したが、鴨川岸七か所から天皇の形代を流すという行為は、鴨川の流れと天皇の身体性が連動するという観念が具現化した祭祀であるといえる。つまり七瀬祓は、鴨川の流れの 7 か所の地点から、賀茂神の神威を天皇の身体に汲み上げるという、更に進化した御禊の形態と言えよう。

元慶 8 年（884）宮中で殺人事件を起こした陽成天皇が廃されて、宇多天皇の父帝である光孝天皇が即位した。伊藤氏は、南北朝期の北畠親房は『神皇正統期』のなかで、自ら殺人を行うという大きな罪を犯した天皇が廃され、新しい王統が誕生したことを大きく評価したことを紹介している。北畠親房は、陽成天皇以前の御代を上古であり、

手本にするべきは、光孝天皇以降の例で、この王統の移行が時代の転換点であるとしている。さらには、光孝天皇への王統の移行を陽成天皇の罪によってそれまでの王統が穢されたからであるとしている。(54)

しかし光孝天皇は、天皇の不徳が招くと信じられていた大震災の中で崩御した。後を受けて即位した宇多天皇は王統の正当性を高めるため、ことさらに天皇の身体的神聖を強調する賀茂臨時祭を創設したのであった。このことが天皇を穢れから遠ざける下地となり、中世の知識人である北畠親房への歴史観に影響を与えたものと思われる。

賀茂臨時祭の特異性は、天皇が自らの祖神である天照大神ではなく、賀茂氏という氏族の神を、天皇が祭主として神をその身に降ろすシャーマンの役割を務めることにある。王権はこの後、石清水臨時祭の石清水八幡宮、春日大社、大原野神社、平野神社、松尾神社等、有力社の臨時祭を行っていくこととなる。

黒田日出男氏は中世の天皇は日月食の妖光に照らされると、国家に天変地異が起こると恐れられていたことを解明している。黒田氏はこの兆候は9世紀に始まるとしている。(55)

9世紀半ばに在位した清和天皇は、貞観11年（869）の貞観地震の際、地震が起こったことは天皇自身の不徳のことと自身の責任を表す詔を出した。しかし、この時点では天災が天皇の責任であるという観念はあっても、天災に天皇が遭遇することで、世が乱れるという考えは顕著ではない。賀茂神に選ばれ、賀茂神と一体であるという宇多天皇の宗教的世界観によって形成された観念が、日本国の神々と一体である聖なる天皇の身体に穢れが触れると、神々が守る日本国土に天変地異が起こるという概念を生み出したものと思われる。(56)

これに対し片岡耕平氏は、「穢れとは九世紀半ばに人工的に作り出された概念」であると位置づけており、貞観地震の2年後に起こった鳥海山の噴火について、成すべき神事を実施しなかったことと、穢れが及んだことによって、神の怒りが招いたものとみなされていたとしている。(57)

しかしながら、『大鏡』では、宇多天皇が賀茂神から即位の神託を得たのは、賀茂堤で鷹狩をしていた際であると記述している。神の聖域で狩猟するという行為は、中世においては聖域を穢す行為であり、神の神託を得る清浄なる王の姿とはかけ離れている。

渡来系氏族を母方にもつ桓武天皇は、大陸系の狩りである鷹狩を愛好し、嵯峨天皇・仁明天皇もこれに倣った。しかし、清和天皇の時期になると、仏教的な殺生罪業観により鷹狩が停止されている。(58) これは、清和天皇の御代が貞観地震をはじめとした多くの災害や疫病の流行が重なったことで、王権は躍起になって災害の原因を探ろうとしたことに起因する。片岡氏のいう「人工的に作り出された概念」である穢れは、仏教的倫理観がもたらす罪悪感と当時の人々が自然に対して抱いた恐怖が作り出したものであっただろう。しかし、王統が異なる光孝天皇が即位すると、天皇による鷹狩は再開され、宇多天皇も盛んに行っている。

片岡氏自身も「（延喜）式によって、神慮に障る不浄の内容が具体的に規定された点にこそある」と述べているように、9世紀半ばから後半にかけては、天皇は殺人を犯してはいけないという罪の概念はあっても、どのようなことが穢れであるかの概念がはっきりと確立していなかったと思われる。(59) 宇多天皇が重要視したのは、神罰を恐れて実態のない穢れを避けることではなく、賀茂神の承認のもと桓武－嵯峨－仁明－光孝－宇多と続く自身の直系王統の正統性を印象付けることにあった。(60)

これらのことから、賀茂臨時祭成立時期の御禊は、穢れを祓うという意味よりも、賀茂神からの神威を得ると

いう意味が強かったと考える。

三橋正氏は宇多天皇の賀茂臨時祭の創設について「伝統的な宮中祭祀とは異なる新たな神観念による「臨時祭」を創始し、神祇信仰の歴史に新たなる一頁を作ったのである。」としている。先述したように三橋氏は、賀茂祭では天皇以外の上級貴族も奉幣を行う公の祭祀であるのに対し、天皇が主催となって行われる「臨時祭」は天皇個人の祭祀であるとの位置づけを行っている。(61)

これに対し私は、宇多朝の「賀茂臨時祭」に限定していえば、宇多天皇と同年代の上級貴族の子息が、一丸となって舞を舞い、神を降ろし慰撫する祭祀を行うことによって、その集団が旧勢力から独立し、新たな聖王を支える新たな王権として機能することを狙った祭祀ではなかったかと考えている。父帝である光孝天皇が、天皇の不徳が招くとされた大災害の中で崩御したことは、ともすれば宇多天皇の正統性にマイナス要因となりうる。東国からの脅威に対し、王権の構成員が問題解決のために一丸となって祭祀を行うことにより、このマイナス要因は構成員を結束させるプラス要因へと変換されるのである。

また、本稿では天皇のプライベート空間である清涼殿に平安京を御溝水によって再現し、その空間で平安京の在地神と一体となる祭祀が賀茂臨時祭であると述べた。このことは、律令国家体制の長という前時代の天皇の在り方を大きく変容させ、天皇の身体を平安京ひいては日本国を象徴する聖なる機関として変異させる、大きな第一歩となったと考えている。

一方で賀茂臨時祭と北祭と南祭という対の祭であった石清水臨時祭は、承平・天慶の乱という平安時代前中期最大の危機を乗り越えた王権が、八幡神という境界神（軍神）であり、神仏習合の中心的存在にもなった神に向けて行った報賽の祭祀である。石清水八幡宮は、平安京を取り囲むようにして南北へ流れる鴨川・宇治川・桂川の三河川が合流する地である男山に建立された。平安京の都市空間と天皇の身体性の関係性を考察する上で、注目すべき立地である。水神であり王権にとって境界神的な機能を果たす賀茂神の祭祀が、八幡神の祭祀にどのように影響を与えたか、平安時代の王城鎮護の成立過程を考えるうえで、今後注目していきたいテーマである。

古代においては、人々は神の祟りを恐れて在地神や祖神を祭り、殊に荒ぶる神々は排除されてきた。平安時代、祟りを鎮める祭祀から王権を守る鎮護国家のための祭祀に移行する過程の根底には、仏教的な世界観が反映しており、神仏習合の過程のなかで、王権に仇なす荒ぶる神々は、慰撫されるという側面を持つことになる。(62)

本稿で取り上げた賀茂臨時祭の祭神は河川の水神である。あらゆる生命の源である水によって行われる禊という行為は、本来神と交感し、自然の神秘を体感するものであった。ところが宮廷祭祀のなかでは、穢れを祓うという機能を求めすぎるあまり、本来の豊かな宗教的感覚が忘れ去られてきたのであろう。目を凝らすと古の水辺の神女の幻影が、恐怖と猜疑に満ちた王権の渇きを癒すために、密かに取り込まれていったことが推察されるのである。

賀茂臨時祭で行われた賀茂神という水神と王権との融合が、その後の王権における宗教的国家観を大きく変容させる契機となったのである。

［註］

（１）山上伊豆母 『日本芸能の起源』 大和書房 1997

また、宗教学者ミルチャ・エリアーデは、山上氏と同様な見解を述べている。すなわち、世界で多くの民族によって行われている水による禊について、水の持つ破壊と再生の力によって、古い物質や観念が一掃され、新たに生まれ変わらせることによって、穢れを祓う機能を持たせたという。（ミルチャ・エリアーデ 『生と再生：イニシエーションの宗教的意義』堀一郎訳 東京大学出版 1971）

（２）平間充子 「平安時代の臨時祭における≪東遊≫―場の論理より奏楽の脈略を読む―」『桐朋学園大学研究紀要』34 155-169 2008

平間氏は、三橋正氏の臨時祭は天皇個人の奉幣であるという論をもとに、臨時祭における御禊と東遊が奏せられる役割について論じられている。本稿では賀茂臨時祭の成立に宇多天皇の宗教的世界観がどのように反映されているかについて論ずる。

（３）図1、3、5、10、15は、『角川日本史事典』 角川書店 1996の清涼殿図をもとに、著者作成

（４）西宮一民 『上代祭祀と言語』 桜楓社 1990

（５）山上伊豆母 『日本芸能の起源』 同上

（６）山上伊豆母 『増補版 巫女の歴史』 雄山閣 1996

（７）岡田精司 『神社の古代史』 学生社 2011

秦氏は秦の始皇帝の子孫であることを称しているため、松尾山の大山咋神を祭っているのは祖神信仰ではなく、在地信仰であるとしている。

（８）賀茂社の祭礼である賀茂祭の折、松尾神社の禰宜・祝に対しても幣帛が行われていた。（三宅和朗 『歴史文化ライブラリー111 古代の神社と祭り』 吉川弘文館 2001）

（９）大和岩雄 「木島坐天照御魂神社」「賀茂神社」『神社と古代王権祭祀』 白水社 1989

（１０）飯沼賢司 『八幡神とはなにか』 角川ソフィア文庫 2014

（１１）保立道久 『黄金国家』 青木書店 2004

保立氏は嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が建立した壇林寺が秦氏の本拠地である嵯峨の地に所在していたことを例に、嵯峨天皇と秦氏との関係を指摘している。

（１２）三宅和朗 『歴史文化ライブラリー111 古代の神社と祭り』 同上

（１３）神職が大麻を使用しての祓いを行う場合は、榊等の枝に大麻を結んで祓いの祭具とすることもある。この場合、ある程度の大きさのある祭具を水量が少なく溝幅の狭い御溝水に流すというのは、無理があるように思う。しかし、石清水臨時祭の『江家次第』の記述では、天皇⇔陪従⇔宮主の大麻の受け渡しは、天皇の笏に大麻を掛けて受け渡しが行われている。賀茂臨時祭でもこのやり方で大麻の受け渡しが行われていたら、大麻は乾燥した葉のみで、御溝水に流すことも可能であろう。

（１４）山上伊豆母 『古代祭祀伝承の研究』 雄山閣 1985

（１５）荻美津夫 『平安朝音楽制度史』 吉川弘文館 1994

（１６）『古今和歌集』「東歌」は以下の通り。

	地域(詞書)	和歌	作者
東歌	東北地方(陸奥)	あふくまに霧立ちくもりあけぬとも君をはやらしまてはすへなし	無記
		みちのくはいつくはあれとしほかまの浦こく舟のつなてかなしも	無記
	関東地方(相模)	こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれ浪	無記
	関東地方(常陸)	つくはねのこのもかのもに影はあれと君かみかけにますかけはなし	無記
		つくはねの峰のもみちはおちつもりしるもしらぬもなへてかなしも	無記
	中部地方(甲斐)	かひかねをねこし山こし吹く風を人にもかもや事つてやらむ	無記
	中部地方(伊勢)	をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはむ	無記
	賀茂臨時祭	ちはやふるかものやしろのひめこまつよろつ世ふともいろはかはらし	藤原敏行

（１７）「東遊」『日本古典文学大系３古代歌謡集』 岩波書店　1957　　鍋島本を底本としている。

（１８）荻美津夫 『古代中世音楽史の研究』 吉川弘文館　2007

（１９）野本寛一 「三保羽衣伝説の背景」『地方史静岡』２号　1972

（２０）荻美津夫 『古代中世音楽史の研究』 同上

（２１）伊藤喜良『日本中世の王権と権威』思文閣出版 1993

（２２）柳澤和明 「貞観地震津波による陸奥国の被害と復興」『シリーズ古代史をひらく２　天変地異と病』 岩波書店　2024

（２３）保立道久 『歴史の中の大地動乱－奈良・平安の地震と天皇』 岩波新書　2012

（２４）古藤真平 『宇多天皇の日記を読む－天皇自身が記した皇位継承と政争』 臨川書店　2018

（２５）三橋正 『平安時代の信仰と宗教儀礼』 群書類従完成会　2000

（２６）石橋克彦 「文献史料からみた東海・南海巨大地震」『地学雑誌』108 巻４号　1999

（２７）川尻秋生 『日本古代史⑤　平安遷都』 岩波新書　2011

（２８）保立道久 『歴史の中の大地動乱－奈良・平安の地震と天皇』 同上

（２９）三橋正 『平安時代の信仰と宗教儀礼』 同上

（３０）寛平３年（891）２月に藤原基経が死去すると、宇多天皇はその年の 12 月に、同母兄姉妹を皇籍に復帰させ、親王・内親王宣下を行っている。

（３１）寛平４年（892）に賀茂斎院直子女王が薨去後は、宇多天皇皇女君子内親王が賀茂斎院に卜選された。

（３２）本多健一 『京都の神社と祭　千年都市における歴史と空間』 中公新書　2015

（３３）寛平元年に始めて行われた賀茂臨時祭において舞人を務めた人物は特定できないが、伊藤喜良氏によると、天皇の側近となる上級貴族の子息は、十代から二十代前半で左右衛府・近衛官人を務め、宮中儀式においては舞人を務めている。(『日本中世の王権と権威』)

（３４）現在の京都御所に再現された滝口には、流れを一旦せき止めたダムのような仕組みを作り、そこから水を落とすことによって、「御溝水」の流れが滞らない仕組みが作られている。穢れを祓うためには、流れのある水が必要であり、清涼殿で「御禊」を行うための装置であると思われる。

（３５）中込律子 「儀礼・儀式と馬」『馬と古代社会』 八木書店　2021

（３６）保立道久 『歴史の中の大地動乱－奈良・平安の地震と天皇』 同上

（３７）杉田建斗 「日本古代における宮中鎮守祭祀の構造―御巫・宮主・戸座・忌部を中心に」『史學雑誌』133編２号　2024

（３８）八坂神社の歴史を記した『八坂誌』によると、祇園会の始まりは、貞観11年（869）6月7日に卜部日良麻呂なる人物が、勅命により開始したとされている。全国の国数と同じ長さ66本の鉾を立て、6月14日に八坂神社から神泉苑へ洛中洛外の人に運ばせた。東北で起こった貞観地震が同年5月26日のことなので、地震発生から日を置かずに実施されている。卜部平麻呂と卜部日良麻呂は同一人物であると考えるのが自然だが、伊豆卜部氏が鎮護国家の祭祀に、主導的な役割を果たしていたことを示すエピソードである。ただし、卜部平麻呂はこの時三河権介に任じられており、平麻呂本人が在京していたかは疑問がある。

（３９）太田亮 『姓氏家系大辞典』 角川書店　1963

（４０）網野善彦氏によると、漁業・水運業で賀茂社に奉仕した御供人・御祭人には、宣旨によって交易・交通の特権が与えられてきたとしている。(『日本中世の非農業民と天皇』 岩波書店　1984）漁業・水運業に従事していた卜部氏が、賀茂社を通じて王権と密接につながっていたことを示しているだろう。

（４１）原秀三郎『地域と王権の古代史学』 塙書房　2002

原氏は三嶋大社の表記について、現在の社名は「三嶋大社」であるが、当時の記録に記載されている表記は「三島大社」であることから、著作のなかで「三島大社」と表記されている。本稿でもこれに倣い、「三島大社」と表記することとする。

⑤の三島大社の祭神について、現在の祭神は、大山祇神・事代主神となっており、もともとの祭神については諸説ある。これは南北朝期の公卿北畠親房が記した『二十一社記』の解釈の違いによるものであるが、三嶋大社所蔵『二十一社記』の賀茂明神の記述について、原本と異なる記述があることを原秀三郎氏が紹介している。原文を確認できないので、そのまま引用する。

一、賀茂明神、葛木鴨、山城賀茂各別也云、葛城地神、山城天神、此賀茂（山城）、伊豆国賀茂郡三島大明神、是月（同）神、本豆州白浦賀志本之神也、景行（天皇）東征時、霊瑞八咫烏現三島地、名本天神大自在云々、天平年造栄（営）初、伊予国三島同躰、是則雷号也、八咫烏奉仕之、

賀茂社の祖神である賀茂建角身命は神武天皇の東遷の際に、八咫烏に変じて道案内をしたとしているが、景行天皇の東国遠征の際に、八咫烏が現れ道案内をしたころから、山城賀茂神と同神であり、雷神であると記してある。原秀三郎氏はこの内容を紹介した上で、賀茂社の神ではなく、伊予大三島大山祇神社の祭神と同神説を取っているが、伊豆国賀茂郡が賀茂氏の支配地域であることから大変興味深い内容であるとしている。

尚、伊予大三島大山祇神社の摂社にも雷神が祭られており、賀茂社との何らかの繋がりも推測される。

私も、天皇家の宗廟である賀茂社と同神であることは、三島大社の繁栄に繋がるという三島大社側の経営戦略とも考えられる。同神説を全面的に採用することはできないが、海洋の神々を祭る三島大社が賀茂氏の支配地域に所在することによって、賀茂社から火性の雷神を水性の巫女王が慰撫するという宗教的影響を受けたのではないかと考える。

（４２）松尾大社摂社の月読神社は、壱岐から勧請された神社であるという。秦氏と壱岐卜部氏との繋がりも考え

られる。

（４３）『日本三代実録』によると対馬の住民であった卜部乙屎麻呂は、海鵜を捕獲するために新羅との国境付近で狩りをしていたところ、新羅側に拘束される。しかし拘束された新羅で、対馬に攻め入るための軍備を整えている様を見たため、決死の脱獄を行い、大宰府に新羅の状況を報告したという。このような記述から壱岐・対馬の卜部氏は、王権に対し呪術的奉仕を行うだけではなく、国境付近の海域の軍事的情報をもたらす存在であったことが分かる。

（４４）西郷信綱　『古代人と死－大地・葬り・魂・王権』　平凡社　1999

（４５）富士市の駿河湾岸でも水位の上昇があった痕跡が見られるとしている。

松原純子、宍倉正展、岡村行信　「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」『活断層・古地震研究報告』No.7　2007

（４６）西郷信綱　『古代の声　うた・踊り・市・ことば・神話』　朝日新聞社　1985

（４７）前川明久　「古代の東国と東遊」『続日本紀研究』　7（4）　1960

（４８）荻美津夫　『古代中世音楽史の研究』　吉川弘文館　2007

田方郡（現三島市）に鎮座する三島大社は、古くは賀茂郡に鎮座していたとされている。賀茂郡は賀茂社を氏神とする山城の賀茂氏とは別系統の葛城の賀茂氏の支配地域であることを明らかにしている。

（私見）古代氏族の変遷について考察する資料は少なく仮説に過ぎないが、葛城賀茂氏の氏神である高鴨神社が上賀茂神社・下鴨神社の大本であると称していることから、山城賀茂氏が同じ山城国を本拠地とする秦氏との強い結びつきにより葛城賀茂氏から分かれたと考えると、「東遊」と賀茂社の繋がりを感じさせる。

（４９）古瀬奈津子　『日本古代王権と儀式』　吉川弘文館　1998

（５０）『寛平御記』における即位を暗示させる神託の記述は、神託を受けたであろう 10 代の少年時代書かれたものではなく、即位後にまとめて書かれた記述のように思われる。おそらく、関白藤原基経の存命中は、自身が賀茂神の神託を受けて即位したという思いを公表していなかったのではないかと推測する。

（５１）三橋正　『平安時代の信仰と宗教儀礼』　同上

（５２）岡田荘司　『平安時代の国家と祭祀』　続群書類従完成会　1994

（５３）伊藤喜良　『日本中世の王権と権威』　同上

（５４）伊藤喜良　『中世王権の成立』　青木書店　1995

（５５）黒田日出男　『王の身体　王の肖像』　平凡社　1993

（５６）桓武天皇が、藤原種継の暗殺事件に連座して皇太弟を廃され亡くなった早良親王の怨霊を恐れたように、反乱や政変、天災が原因で生じる怨霊によって天皇自身が悪影響を受けるという観念は、平安時代初頭から存在したと思われる。

（５７）片岡耕平　『穢れと神国の中世』　講談社　2013

片岡氏は 9 世紀半ばに穢れの概念は作られたとしている。

（５８）中澤克昭　『狩猟と権力　日本中世における野生の価値』　名古屋大学出版会　2022

（５９）陽成天皇は譲位後狩りを頻繁に行った。『紀家集』「競狩記」には、陽成上皇が狩猟の際、近隣住民の馬を略奪し、自身の狩猟に用いたことが宇多上皇に報告されたことが記されている。宇多上皇は、近隣住民に被害を及ぼす行為を非難しており、狩猟は住民に影響がない収穫の終わった時期に行うべきとしている。（川尻秋生 「『紀家集』と国史編纂－「競狩記」を中心として」『史観』150 号　2004）

宇多天皇は猟によって生じる穢れではなく、統治者としての在り方に心を配っていたことが分かる内容である。

（６０）私見では、天皇が穢に触れることについて過剰なまでに回避されるように経緯は、醍醐朝の菅原道真の怨霊が原因と恐れられた疫病の流行や朱雀朝の承平・天慶の乱が契機となったと考えている。

（６１）三橋正 『平安時代の信仰と宗教儀礼』 同上

（６２）飯沼賢司 『八幡神とはなにか』 同上

脚注以外の主な参考図書

平安時代の通史として

瀧波貞子 『日本の歴史 5　平安建都』 集英社　1991

坂上康俊 『律令国家の転換と「日本」日本の歴史 5』 講談社　2001

下向井龍彦 『武士の成長と院政　日本の歴史 7』 講談社　2001

槇村寛之 『謎の平安前期―桓武天皇から『源氏物語』誕生までの 200 年』 中公新書　2023

樋口健太郎　栗山圭子編 『平安時代天皇列伝』 戎光祥出版　2023

宗教史の資料として

槇村寛之 『古代の都と神々　怪異を吸い取る神社』 吉川弘文館　2008

災害史の資料として

三宅和朗 『日本古代の環境への心性史』 吉川弘文館　2021

今津勝紀 『日本古代の環境と社会』 塙書房　2022

賀茂臨時祭について

所功 「「賀茂臨時祭」の成立・変転と祭儀」『光格天皇関係絵図集成』 国書刊行会　2020

宮中儀式について

山折哲雄 『天皇の宮中祭祀と日本人　大嘗祭から謎解く日本の真相』 日本文芸社　2010

桜井好朗 『祭儀と注釈　中世における古代神話』 法蔵館　2023

宮中芸能について

中本真人 『宮廷御神楽芸能史』 新典社　2013

中本真人 『宮廷の御神楽―王朝人の芸能』 新典社　2016

【付記】

20 年前の修士論文以来、初めての論文を書く私に対し、20 年前と変わらず根気強くご指導くださった恩師の飯沼賢司先生、細部に至るまで拙稿の矛盾点に対峙してくださった同級生の稙田誠氏に心より御礼申し上げます。